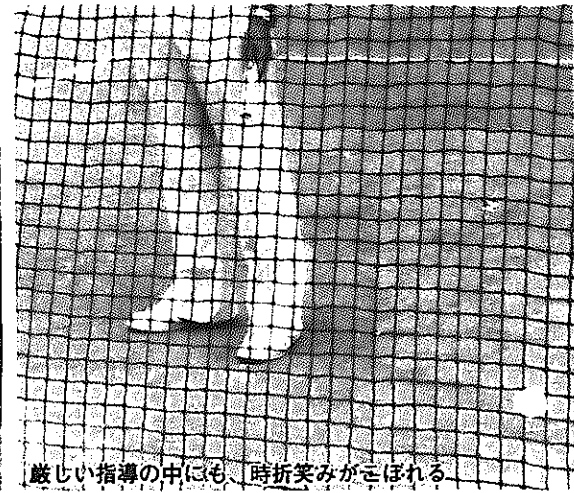


選手の動きを見つめる目は鋭く、矢継ぎ早に指示が飛ぶ

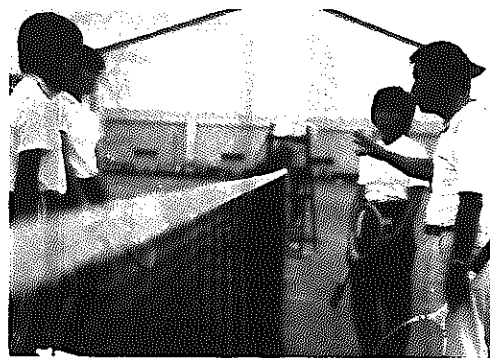


厳しい指導の中にも、時折笑みがこぼれる

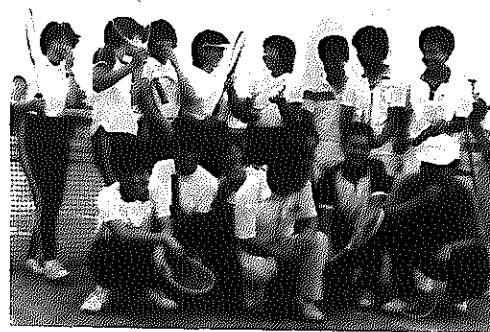


軟式庭球の名門校に育てて18年

今井 健さん (白根高校教諭・古川)



ゲームを振り返ってアドバイス



部員に囲まれて…みんな日焼けしてまっ黒

「練習量と厳しさはどのクラブにも負けないでしょうね。やる以上は勝たせてあげたいし、また勝ちたければ人と同じことをやっていてはだめ。生徒も私もテニスで明け暮れの毎日です」と、ラケットを片手に語る今井先生。

三十七年から三十九年までは加茂農林高校庄瀬分校、四十年に白根高校に着任して以来、十八年間社会科の教師として勤め、白根市にはなじみの深い先生です。

インターハイに十チーム、国体に四チーム、北信越大会には十六チームと団体では二年連続選手を送り出しています。「なかでも昨年、小林・相田組が、北信越大会に優勝してくれたのが、最も印象に残っている出来事でしょうね」と、日焼けした顔がほころぶ。

「以前は、私自身ボールを追

かけ、がむしゃらに練習させてきたけど、四十歳を過ぎてからはコーチ業に専念しました。卒業した先輩たちがたくさん指導に来てくれることも、いい励みになるんですね。日曜日ともなると、現役と同じくらい来てくれるんですよ」

長男健一くんは、同校二年でクラブのキャプテン、二男幸治くんも白根第一中でテニス部に所属、奥さんも交えて年二、三回は家族テニスを楽しむというテニスファミリー。「放課後はもちろん、早朝練習や冬季間の室内練習と、休日もない毎日では家庭の犠牲はないとは言えないでしょうね。家族が一番大変だと思いますよ。家族テニスはせめてもの償いです」と、語る今井先生は今、八月一日から始まるインターハイに出場する選手とともに鹿児島に赴いています。

11部落が地域生活センターに植樹

『連帯の庭』が完成



六月十六、十七日の両日、根岸地区の十一部落が協力し合い、地域生活センター敷地内に「連帯の庭」を完成させました。

四月のセンター竣工式が終わった後の部落長会議で、「住民の手で記念植樹をやたらどうだろう」との意見が出され、その計画案を各部落が持ち帰り、それぞれで討議。そして、地区全体の事業として取り組むことになったものです。

全長六十・九メートルの敷地を十一部落に区割りし、造園技術を持つ上塩俵の小柳 護さんの指導で、将来を考えて混み植えは避け、ゆったりとした間隔に、各部落から持ち寄った、松、ナナカマド、カシ、サツキなど約七十本を植えました。

部落長連絡協議会会長の岡田誠次さんは、「それぞれの立場で協力してくださった方々に感謝しています。みんなのセンターという意識があったから、この事業が順調にできたんだと思います。植樹については、大勢の人たちからの参加も考えてはみたんですが限られた面積ということもあり、部落長が代表という形でやっただけです。しかし、これからの管理は、是非、大勢の手でやってもらい、各部落ともこの庭を大切に育てていってほしい」と、語ってくれました。